

背景

キーワード
ディストピア

前史

1516年 イギリスのトマス・モア卿の『ユートピア』が、理想的な社会と逆の社会（ディストピア）を描く。

1924年 ロシアの作家エヴゲーニイ・ザミャーチンの『われら』が、集団利益のための単一国家を描写する。

1932年 イギリスの作家オルダス・ハクスリーの『すばらしい新世界』では、個人の特質が抑制される。

後史

1953年 アメリカの小説家レイ・ブラッドベリの『華氏 451度』では、書物が禁じられて燃やされる。

1962年 イギリスの作家アントニー・バージェスの『時計じかけのオレンジ』が、暴力が蔓延する世界を描く。

1985年 カナダの作家マーガレット・アトウッドによる『侍女の物語』では、キリスト教原理主義の独裁政権が支配するアメリカが舞台である。

ディストピア文学とは、ユートピア（理想的な、完璧な世界）とは対極にある悪夢のような社会像を描くジャンルである。1516年にトマス・モアの『ユートピア』が登場してから数世紀にわたって、さまざまな作家が専制国家（共産主義国家もファシズム国家も）、貧困、拷問、大規模な迫害、人心のコントロールといった題目を取りあげ、ディストピアを再現してきた。

作家たちはディストピアの世界を利用して、人間がいただく不安の中核を探り、なんの抑制もなく物事が進んだ場合に起こりうる未来の姿を描き出した。たとえばマーガレット・アトウッドの『侍女の物語』（1985年）では、軍事政権が支配する世界を描き、そこでは女性はさまざまな権利を剥奪され、ただ子供を産むだけの存在と見なされている。

転換点

ディストピア文学はおもに想像上の未来に焦点を絞り、新たなテクノロジーと社会の変化により生じる恐怖を描くものが多い。20世紀には、核爆弾や劇的な

ジョージ・オーウェルは1903年にインドで、エリック・アーサー・ブレアとしてイギリス人両親のもとに生まれた。イギリスで教育を受けたのち東洋へもどり、ビルマのインド帝国警察に入職する。1928年にパリへ移り、1929年にまたロンドンに移って『パリ・ロンドンどん底生活』（1933年）を執筆した。不況のあおりを食らった貧困を身をもって体験するために、オーウェルはイギリス北部のウィガンを旅した。同じ年にアイリーン・オショナーシーと結婚し、その後スペイン内戦に参戦、喉に貫通銃創を受けた。1937年にイギリスへもどり、

“
過去をコントロールするのは
未来をコントロールする。
現在をコントロールするのは
過去をコントロールする。”

『一九八四年』

気候変化のシナリオが引き起こす脅威が、ディストピアの強力な供給源となった。

ジョージ・オーウェルの『一九八四年』は、最も有名な近代ディストピア小説である。この作品の出発点は、スターリン主義台頭に対する恐怖である。オーウェルは民主的な社会主義を信奉していたものの、一政党が全権を掌握するソヴィエト連邦が出現したことを、社会主義とはほど遠いと考えていた。1936年のスペイン内戦で、スターリン支持派が味方であるはずの党派を攻撃して、反フランコ勢力が分裂するさまも目撃していた。

1941年にBBCに入社するも、1943年に退社。ふたたび執筆活動をはじめ、『動物農場』（1945年）を発表すると、すぐに大評判となった。同年、妻が急死し、オーウェルはスコットランドのジュラ島に引きこもって、そこで『一九八四年』（1949年）を書きあげた。1950年に肺結核により46歳で死去した。

ほかの主要作品

1934年 『ビルマの日々』
1937年 『ウィガン波止場への道』
1938年 『カタロニア賛歌』

参照 『カンディード』96-97 ■ 『ガリヴァー旅行記』104 ■ 『すばらしい新世界』243 ■ 『華氏 451度』287 ■ 『蠅の王』287 ■ 『時計じかけのオレンジ』289 ■ 『アルテミオ・クルスの死』290 ■ 『侍女の物語』335

オーウェルはすでに、そのような背信行為の暗然たる様子を中編小説『動物農場』（1945年）で描写していた。また、新たな作品のためのある種のひな型と言えるものも入手していた。それはロシアの作家エヴゲーニイ・ザミャーチンが『われら』（1924年）で描いた世界で、そこでは個人の自由はもはや存在しない。

『一九八四年』が描いているのは、プロパガンダを通して市民を操り、政治権力を維持するために真実を偽りと見なす全体主義社会である。ここで描かれているディストピア社会では、『動物農場』の最初に起こる革命で約束されたような希望が存在せず、また個々人が大きな社会システムの単なる歯車となっていて、はるかに暗澹たる様相を示している。

歴史の終焉

『一九八四年』の冒頭の文——「四月の晴れた寒い日で、時計が十三時を打っていた」——は、一日の時間構成の本質までもが変わってしまったという事実を読者に突きつける。主人公のウィンストン・スミスがアパートメントの住居にはいる。スミスは第一エアストリップ（かつてのイギリス）の首都ロンドンの市民で、そこは世界核戦争後に存在する大陸をまたいだ三強国のひとつ、オセアニアの一区である。壁を埋めつくすポスターは、「豊かな口髭をたくわえ、いかついが整った目鼻立ちをした四十五歳くらいの男」の肖像で、その「目がこちらがどう動いてもずっと追いかけてくる。その下には〈ビッグ・ブラザーがあなたを見ている〉というキャプションがついている」。ビッグ・ブラザーはオセアニアを統治す

るリーダーである。スミスが住む世界はエリートに支配され、人口の85パーセントを占める大衆（「プロール」）は、名称と実態がかけ離れた4つの省によって管理されている。4つとは、戦争を監視する平和省、治安を維持する愛情省、食糧配給を含めた経済を統括する潤沢省、そしてニュースや大衆教育を担い、プロパガンダを発行して人々の考えを統制する真理省、別名ミニトゥルーがある。

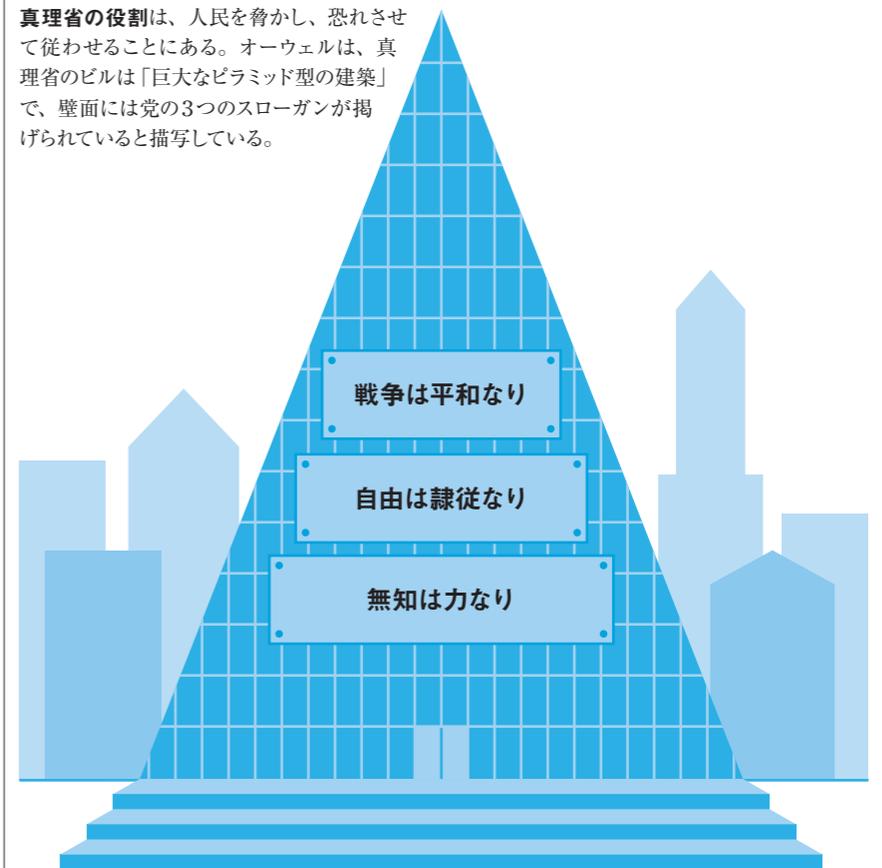
人々を統制するための主要な方策のひとつがニュースピークで、これは現在と過去の真実を定める真理省の言語であり、歴史は国家の強権政策の変化に合う

ように改変されて書きなおされる。ウィンストン・スミス自身も真理省で働き、歴史の記録を編集したり、オリジナルの文書を「記憶穴」に投じて焼却したりしている。歴史は停止してしまい、「果てしなくつづく現在のほかには何も存在せず、そこでは党がつねに正しい」。

すべてを監視する政府

市民の密偵や盗聴をするために、テレスクリーン、監視カメラ、隠しマイクのネットワークが張りめぐらされている。これらは現政党の保護を監督する思考警察によって運営されている。」

真理省の役割は、人民を脅かし、恐れさせて従わせることにある。オーウェルは、真理省のビルは「巨大なピラミッド型の建築」で、壁面には党の3つのスローガンが掲げられていると描写している。



ジョージ・オーウェル

